

語形と語義と表現と

— 辞書の使命とその限界 —

原 田 芳 起

一 論のいとぐちに

辞書ほどありがたいものはない。そして逆説的だが辞書ほど厄介なものはない。古典を読む時に、座右に欠かせないものは辞書であるが、辞書が常に正しい知識を提供してくれるものではない。つぎつぎに新しい辞書が出版され、改善もされ、ますます便利にもなっているが、完全に誤りのない辞書の出現は望む方が無理である。百パーセント保証できる辞書として推薦されるものは、現実にはまずあるまい。辞書の利用法は、その語義解説を一応の参考として、具体的な表現例について適合するか否かを考えることである。もともと辞書というものは、現実の表現例を集めて、そこから帰納的に語義を考えて記述するのである。表現例文が片寄っていたとか、

極端に少なかったとかいう場合、その解釈作業が完全に行なわれな
い場合もしばしばあるはずである。例文の集収がまた極めて困難極
まる作業である。その例文の原典がまた十分に研究されていない
で、その本文さえ確立されていないものも古典には随分とある。そ
んなわけで、辞書の編集には、ともすればはまり易い欠陥・弱点
があり、いわゆる泣きどころがある。先行の語彙集なり辞書なりの犯
した誤りを、安易に踏襲してしまうことが、避けにくいということ
である。例文の孫引きは避ける方針を取っていても、同じ例文を採
用しなければ、他に用例が見あたらぬ場合は、同じ例文を載せざ
るを得ない。先行辞書の例文に従って、改めて検討してみる労力を
省いてしまうことも珍しくないようである。

実例をあげて考えてみる。宇津保物語に、「御さいまつ」とい
語を含んだ表現例がおおよそ八例ある。宇津保には八例もあるが、

他の作品には蜻蛉日記に一例あるだけで、分布がはなはだしく局限されている。枕草子にも源氏物語にも全くこの語形は見当たらないのである。この八つの表現例を、まず辞書的先入主なしに吟味してみると、貴人の車とか馬とかを、下人がたいまつを手持って先導しつつ、行く手を照明している形を考えたくなる。この直観的な印象的な、しかしやや漠然とした理解をたしかめるには、まず辞書がどう処理しているか検討してみなければならぬ。理解を確かなものとするためには、宇津保物語・蜻蛉日記に見られた九つの表現例と辞書の記述との間をいくたびか往きつ戻りつして考察を進めて見る外に途もなかる。辞書だけを物指しにしてこの現実の表現例の意味を測定してみることは、かなり危険なことにように思われる。

辞書では、どれを取って見ても、「さいまつ」という語形で採録している。そしてその語形を「割き松」の音便形であると定めている。「たいまつ」が「焚い松」であり、「ついまつ」が「続い松」であるのと、同じように処理したものと見られる。

しかるに、現実の表現例の中には、「さいまつ」という語例は全くない。はたして「さいまつ」という単語が存在したかどうか、そこを疑わしい。仮りに実在したとしても、表現例のどこをとらえて、松樹赤心(松明)を細く割いたものという語原を認めるのか。単なる想像説を超えることは不可能である。

源氏物語に

御さきの松ほのかにて、いとしのびて出で給ふ。(夕顔)
 という文例がある。「みさき一松」は「みさき一松」なる複合語形

を成立せしめ得る。

枕草子に

いと暗う闇なるに、さきにもしたるまつかのけぶりの香かの、車のうちにかがえたるもをかし。(いみじう暑き頃)

とある、車の先頭に松明を持ったおのこが先導している。作者自身の車だから「先に立つ炬火」という意味になり、「さき一まつ」の語形を成立せしめ得よう。

大いなる木どもともに車を立てたれば、まつかのけぶりのたなびきて、(なほ世にめでたき物)

という表現でも、車と炬火との位置関係は前例に同じと知られる。宇津保物語・蜻蛉日記の「御さいまつ」の表現例におけるたいまつを取るおのこの位置は、源氏物語・枕草子の先導する松明の場合と同じであると思われる。辞書の記述を尺度とした文意測定は、はたして妥当であるか、吟味の要がある。

二 御さいまつ—その表現例と辞書

前項に続けて、「御さいまつ」の語形・語義に関して、表現例と辞書との間を往復してみよう。煩をいとわず、全部の例文を列挙する。引用は、宇津保物語本文と索引本文編(以下本文)に依る。(数字はその頁数。)

句読及び右傍括弧内の書入れは、
 原田の私見による原態復原。

(1) なかずみまいていつとて、御さいまつかもしてさぶらふ左近のぞうちかまさかにうちかづけていりぬ。(俊蔭・一一四)

る語形であることを示唆するものである。「御前まつ」に続く「き
たき」三字は副詞または形容動詞連用形であることはまちがいない
と判断され、(5)の例文と同様、「にたに」であろう。「御さいまつ
(費多く)」にたにともしたり」で文を成している。

蜻蛉日記の一例は、

ひるまに見えて、御さいまつといふ程にぞかへる。(下・天祿

三)

である。夕刻、「御さいまつ」の用意ととのいたしました」と促されて彼
兼家は帰った、という文意である。車の前方を照らす炬火がすなわ
ち「御さい松」と知られる。少しいねいに表現すれば、「御さき
の松さぶらふ」と言上したということではないか。

今、私の手許に、大言海・岩波古語辞典・新撰古語辞典、その他
二三の辞書がある。そのいずれにも、私の求めた「みさいまつ」と
いう語形は採録していない。そのかわりに、「さいまつ」が項目と
して立てられている。岩波古語では、

さいまつ 《割松》△サキマツの音便形▽たいまつ。「御前の御

——ともしたる兵衛の尉ども」△宇津保祭使▽

とある。例文の切り方にいささか問題がある。場面は、勅旨を体し
て左大臣(源季明)らが左大将(源正頼)にやって来る。その前駆
として「御さいまつ」をともした兵衛尉らが俄かに入って来たので
始めて気づいて右大臣(藤忠雅)以下にばらばらと庭に下りて出迎
えるというのである。あまりに短かく切られていると、「御前の御
さいまつ」という連結形態かとりちがえそうである。新撰古語に

は、

さいまつ《割松》(名)《割き松》のイ音便)たいまつ。「ひる

まに見えて、御——といふほどにぞ帰る」△蜻蛉・天祿三
年▽

とある。例文が異なるだけである。これらは、大言海等の先行辞書
にそのまま従ったものであると思われる。旺文社古語も、同様に
処理されているが、例文引用に、「火をくらうなさむとて、御——
もくらうなさせたまへば」△宇津保・嵯峨院▽あるのに問題があ
る。例文の出所の注記に誤りがある。昭和35年の初版でその後訂
正がなされているかと思うが、「嵯峨院」ではなくて「国譲・下」
としなければならぬ。この類の出所指示の錯誤はすべて先行辞書
の誤りをそのまま引き移したもので、他にも多くある例である。

「みさいまつ」の中から単語「さいまつ」を抽出して、その語原
構造を「割松」の音便だとする説の淵源がどの辺にあったかは、調
べてみたことはないが、最近の辞書の処理は大言海から出ているの
ではないかと思う。だから一度は読んでみた方がよい。批判的な見
解を立てるにしても、一度大言海の位置まで返して、そこから改め
て考えなおしてみるのがよろしかろうと私は思う。そこで不審な点
があったら、作品の中の表現例を集め、中世近世の注釈を調べてみ
ることにしよう。ここでは、十分に言語学的な省察を加えるべきは
勿論である。

さいまつ(名)《割松》(さきまつ)ノ音便(割松、さいばり。割
薪、さいまき(松明)ニ同ジ。宇津保物語、国譲、下廿「御さいまつ

「おまじつ」といふ連結形態かとりちがえさうである。新撰古語に

燃シワタシテ」同、嵯峨院^{八十一}「火ヲ暗ウナサムトテ、御さいまつモ暗ウナサセタマヘバ」蜻蛉日記、下、「昼間ニ見エテ、御さいまつト云フ程ニゾ、帰ル」(大言海)

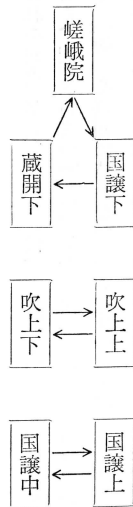
ここで、この論を読んでいただく大方の研究者に、念頭に置いていただきたいことがある。この「御さいまつ」という語形は、蜻蛉日記の一例を除いては、すべてが宇津保物語に集中しているということである。本文の批判的研究も、注釈の研究も、極めて不十分、というよりもまだ門のうちに入るという程度にも到っていない。その証にと言つてはおおがましいが、右に引いた中の、宇津保物語からの例文は、悉く出所の巻名を誤っている。

私が以前に宇津保物語の言語について調べる目的で大海を読んで気がついたので、周知のように宇津保物語の旧板本には、表紙題箋の貼り誤りによると思われる巻名の錯誤がある。その巻名の乱れた板本によって作られた語彙集の中には、「雅言集覧」などがあり、それらの中にたとえば「嵯峨院」と指示してある例文は、ほとんど例外なく「国譲の下」である。「国譲の下」とあるものは、「蔵開の下」である。

ちなみに、小学館の新撰古語辞典が企画された際に、私も項目執筆を引き受けた関係でその企画会議に出席したので、右に触れたような宇津保物語から例文を探る場合に、大言海等の先行辞書からの孫引きが特に危険だといふ趣意の発言をした。そのために、それらの先行辞書が示した出所の巻名の錯誤を調査した結果を報告したのであるが、大言海について調べた所では、ほとんどと言つてよい

薪、さいまき(松明^{クワイブツ}二同ジ。宇津保物語、国譲、下二「御さいまつ

程、左記のような巻名の入れ替わりが見られる。そして他の辞書も、甚だ多くのこの誤りを踏襲している。旧板本の表紙題箋の貼り誤りにもとづくので、図式化して示すことができる。それらの示した巻名は、矢印の示す巻名に改めて、検索してみるべきである。



まれに正しく改められた巻名を示すものがあるから、このような対照表で巻名を訂正すればよいということでは決してないから、必ず改めて検索の労を惜しんではならないことも銘記すべきである。今は宇津保物語の索引もあるから、検索作業は楽である。

それはさておくとして、「さいまつ」について「割松」の音便だとする見解に対して、その当否を吟味してみたいのであるが、この語原構造を追求するにあたって、数々の例文の表現から語義を攻めた形跡があまり認められないかに思われてならない。「さいまつ」が音便形であることは誰が考えてもそうだが、「焚き松」から「たいまつ」へ、「続き松」から「ついまつ」への変化から、極めて単純に「割き松」から「さいまつ」へという線を引いたものと見なさざるを得ない。

「続松」については漢字表記の文献が「ついまつ」という仮名ぶみの表記に先行するから、「ついまつ」が「続松」であることには

何の疑いもない。

「松明」は和名抄にも見えるが、それに対する和名は記していないから、「たいまつ」が始めから「松明」に対する和訓として成立したか否かについては、何とも言えないのである。

和名抄には、燈火部を三つに分けて、燈火類、燈火具、燈火器に類別して語彙を聚めている。「炬火」や「庭燎」や「篝火」などは燈火類の中に入っている。思うに、照明の形態や様式、つまりありかたからとらえられた名である。「炭」や「松明」や「薪」などは、燈火具に類聚されている。照明に使用される資料という線からの命名である。篝火はかがりという鉄器で薪や松明を焚く形態からの名とすれば、その場合の「松明」は油脂を含んだ松樹赤心を指す名であり、この場合も「たいまつ」と呼んだかとなると、むしろ否定的に考えられる。

狩谷掖斎の箋注倭名類聚抄に、

松明 是松之有_レ脂者 松明 謂_二松樹赤心_一、今俗呼_レ松秀_一、是也。統松_ハ疑_ニ用_ニ松明_一所造炬火、今俗呼_レ多以末都者、則統松也。不得_二云_一松明_一。

とある考証は説得性のあるものと思われる。本来の意味では「松明」は「松明」であり、漢語として音読されていたものと考えた。「たいまつ」は和語として成立したもので、時には「炬火」といふ漢語にも対応し、「統松」にも対応した。「松明」にも対応する所があったらう。篝火の燃料として用いる松樹もたいまつであり、やがて漢字資料に出て来る「松明」「統松」「炬火」もすべて

「たいまつ」という便利な名に統一されたのである。

色葉字類抄に、

炬_一チアカシ 燭_一 松明_一タイマツ 統松_一俗用也

とあるのは、漢字資料の「統松」もタイマツと訓じたことを示し、更に降って中世の、下学集では

炬_一或作統松

とあって、タイマツが更に広義になったことを示している。明応五年本節用集では、

統松_一炬_一明

となっているし、平家物語等でも「統松」と書いて「たいまつ」と読ませている。

こうした字書の類には、「さいまつ」という語は全く出て来ない。前にも触れたように、宇津保物語と蜻蛉日記とに集中的に現れてやがて姿を消している。だから前にあげた所が用例のすべてである。

これを観察してわかることは、「さいまつ」というはだかの語形がなく、「御さいまつ」という形に帰一されるだろうということである。「御」を語頭に持たない「さいまつ」という語が現実存在したか否か。さらに、その「さいまつ」という語に、なぜ常に「御」という敬意表現の接頭語が冠せられているのか。説くが如く「割松」であるならば、いかなる形で燈火の用に供せられたのか。すくなくとも貴人の行動に奉仕する照明の具でなければ、常に「御さいまつ」という語形で表現されることはあるまい。それならば、これ

る所があったろう。篝火の燃料として用いる松樹もたいまつであ
り、やがて漢字資料に出て来る「松明」「統松」「炬火」もすべて
も今言われる如き「たいまつ」と同様の物であろう。しからば、共
時的に「統松」または「たいまつ」といかなる意味関係で語義をわ
かち合うのか、それらが全く吟味されていないように思われる。

ここで、前に列挙した宇津保の表現例について、いかなる場面に
いかなる形で「御さいまつ」が現われているのかを一考してみよ
う。(1)では、源正頼の七郎仲澄が舞いながら出て来るのは、庭上で
ある。その脚下を照明するのだから、下人が炬火を手持って先導
する形であるにちがいない。(2)は馬の脚を競べる、つまり競馬であ
るが、出発点から到着点まで、裾かちの衣きぬを着たるおのこたちが、たいま
つを取って進路を照らしている。(3)は、勅使として左大将邸に来た
左大臣たちの前駆の役を勤める兵衛の尉どもが「御さいまつ」をと
もしてまづ邸内に入った来たのであり、「御さいまつ」のありよう
が典型的に表現されている。つまり、源氏物語に見える「御さきの
松」と全く等しい。(4)は仲忠母が参内して、天子の御方に導き入れ
られるに際し、仲忠母を先導していた炬火を消させたのである。(5)
は、右大将仲忠が中納言涼の邸宅に出産祝いにおもむく。涼が庭に
下りて出迎える。右大将の前駆として、近衛の尉や志などが多くあ
り、「御さいまつ」をともしてつかえているのである。(6)は、仲忠
が女三の宮を三条邸に迎えるために一条に來ている。仲忠が宮の東
の前駆を勤めるが、部下の官人ども「御さいまつ」をともさせて、
馬に乗って折り廻しているのである。(7)は(4)とよく似ている。宰相
中将祐澄・藏人少將近澄が女二の宮に想いを懸け、奪い取る機会を
ねらっている。右大将仲忠をそのたくらみを察知して、二の宮が車

を降りて、右大臣邸に入る、その御前みまへを照らす炬火が「御さいま
つ」で、それを暗くしたのは、母の女御が先に降りて二の宮を護る
ようにして進む、それが人目にあらわになることを避けたのであ
る。(8)は、藤壺の女御が新東宮帯同で久々に参内する場面、人々の
車の前を照らす炬火は、車が多いので従って数多く、あたりはあか
あかとしている。表記は「御前まつ」となっている。意味がわかっ
てこの字面を採ったにちがいない。「みさいまつ」と読むべきもの
と考える。

そもそも辞書が記載する語義は、現代語の如く執筆者みずからも
使用している言語で、内省的に語義を規定し得るものではない古典語
の場合は、表現例から帰納する方法によってのみ語義を定め得るの
である。もともと語義が定まっていますそれによって表現が生まれる
ものではなく、語の意義概念は固定的に自覚されているものではな
い。ましてや語原の概念とか語構成の概念は言語生活者の脳裡に頭
在しているものではない。短絡的に少数の文例から「御さいまつ」
なる語形を抽出して、まづ「御」を除去して「さいまつ」を単語と
して認定し、炬火の類なりと判断し、「割きき松」の音便と定めたの
だが、右に観察しきたった如き表現例の解釈を尽くしてみる手順が
取られたとは認めがたい。

その前に源氏物語「夕顔」の巻の「みさきまつほのかにていと
しのびて出でたまふ」という表現との比較は欠くことのできない所
である。「御・さきの松」ではなく、「御さき・の・松」の三単語の
連結形と認めるのが正しいとすれば、「御さいまつ」も「御・さ

まつ」でなくて「御さい・まつ」という語構造と見るのが妥当であると判断すべきである。

三 みさいたまはる

当然辞書に採録されるべき語が、採録からもれているものが、しばしば目につく。「御さいまつ」なども、この語形で辞項として採られるべきだと思うが、適正でないにしても「さいまつ」がどの辞書にも載せられているから、別として、「みさいたまはる」という語形は、宇津保物語にしばしば現れる。宇津保にしか見られなくて、他の作品に傍例がなかったために、辞書編集者もその語としての存在すら認め得なかったわけである。

(1)いとまにましますなるを、女(おんな)のやどりにみさいたまはらん。(藤原君・一八一)

(2)このごろは、みさいたまはるべきたなきところは、かきはらひかきのごはずとてなむ、みせうそくきこえしめざりつる。

(祭使・四三〇)
(3)いとおもしろきことかな、御さい給はらん。(吹上・上・四六六)

(4)月ものこりすくなくなりぬるを、くらのかたへ御さいたまいらんとおもふ給(かつら)・つるを。(國譲・中・一四五七)

話者は、(1)老女、(2)古めきの前帥真菅の恋文の代筆を息子の少将が書いているが、老人の物言いに合わせている。(3)は下級官人清原

松方、(4)は右大将藤原兼雅、やや堅い、しかつめらしい調子の表現になっている点に特殊な位相性を感じるが、これだけははっきりした表現例を示しているのに、その語義を考えるのに全く辞書が使えない。欠陥という外あるまい。

意味は、表現例から推して、「お出いただく」「御案内役を勤めさせていただく」とか、客人として招待したいという意向を伝達する挨拶儀礼の詞である。

これを、「みさい」と「賜はる」とに分割すると、全く意を成さなくなる。「みさい」の原形は「御前・みさき」であることは明らかであるが、「みさい」という音使で終った形は語としての独立性を失っている。「ごめんください」が来訪の意を伝達する儀礼語となった時、二語に分割し得なくなる。「ごめんなさい」とも区別される。もはや複合動詞として一語として扱わざるを得なくなる。

「みさいたまはる」は、単語「みさい」と単語「たまはる」との二つの意味の集合ではなくて、それらは語源としての形態素(モルフォエム)ではあるが、「みさいたまはる」は意味の上から一つである。

前節で考えた「みさいまつ」も、「みさき・の・まつ」が、「みさきまつ」という複合名詞となりおわった段階で、音使が発生したのである。語源の記憶は残存しているか、いつでも「みさきのまつ」という三単語結合形に返り得たと思う。

話者は、(1)老女、(2)古めきの前師真菅の惣文の代筆を息子の少将が書いているが、老人の物言いに合わせている。(3)は下級官人清原

四 御み さき

(1)おほむくるまの御さき、四位十八人、五位卅人、六位五十人。(春日詣・二五七)

(2)ぬひどの、ちんにくるまひきたて、中将「しばし」とてうちへまいる。「御さきの人、うちにまいる人々は、御くるまのもとにさぶらひたまへ。なかたどはひとりまいるなむ」とている。御ともに、まへにたにともして、御さきにかずしらずおほかり。(内侍督・八一九)

(3)まつかた・ちかまさは御さきにたちて、れうわう・らくそんまひて、こと人々四(しり)めにたちて、にしきのごとくちりたるもみぢのうへをあゆみいで給。(国譲・下・一五六)

(4)さきは中のみかどにいたりぬれば、しりは宮まだちかし。

(国譲・下・一六一〇)

御前駆の意味を示すのは、原則的には「御前」と音読していることが多かったようである。前駆は騎馬の先乗りの者をさす。「御さき」は行列の先を行く供人だが、騎馬の前駆ではなかったかに大体においては言えるようである。

右にあげた例文も、解釈に困難をとまなうものがある。(2)は句読を本文編を大きく改め、やや大胆に誤写を推定してみた。「御ともに」以下は、

(松)益多
御ともに、まつにたにともして、御さきにかずしらずおほか

り。

と解説すると、私には了解できる。「まつ」は松明、「にたに」は前にも触れた如く形容動詞連用形、「甚多」を意味内容とする。平安文学研究64輯所載拙論の資料に更に資料を加える。形容動詞「ふさなり」と極めて近い類義語。宇津保にのみ見えるが、使用例は「ふさなり」よりもむしろ多い。現在までのどの辞書も載せていない。(3)の「こと人々四(しり)めにたちて」は文脈から推せば「しりに立ちて」が最適であるが、前田家と同系の天理図書館蔵毘沙門堂も「御るにたちて」で、前田家本の方が孤立異文になるのが気にはなる。例文の(4)と比較すると、「しり」の方がびったりである。

ここにあげた宇津保の例文の「御さき」は前駆とはちがって、貴人の行列の先に立って歩む人々をさしている。源氏物語の「御さきのまつほのかにて」の「御さき」と同じであろう。

そしてこの「御さき」が宇津保物語に見える特異な複合語「みさいたまはる」の「みさい」であり、宇津保物語・蜻蛉日記に見えるやや特異な複合名詞「御さいまつ」の「みさい」であると判断して誤りはあるまい。

五 和名抄の分類項「燈火類」「燈火具」

さきに、「燈火類」と「燈火具」とを類聚の項目として分けたことは、すこぶる面白いと思われる。今日のわれわれの語感では、炬火も松明もさほど別種の名目と思えないが、その和名の「たてあか

し」または「たちあかし」となると、人が庭上に立って行事の場を照明するという形を意味するから、明らかに照明具としての「松明」^(しょうめい)「続松」^(つづまつ)とは区別されるべきである。しかし和名抄そのものに「字書云、炬、束薪灼之」と記しているから、炬火が後世にいう所の「たいまつ」と同じと見なすべきである。「たてあかし」という和訓の方は、明らかに人が手に持っていたいまつを焚くという形の方からとらえているから、字書の「薪ヲ束ネテ之ヲ灼ク」という動詞句から理解したのである。

「松明」を「燈火具」に属させたのは、右の「薪」に相当するものとして見ているのである。思うに「たいまつ」という和訓は、「松明」のそうした照明のために焚く松樹という意味でまず生まれものである。それが次第に広義に用いられて、「炬火」に対する和訓ともなったものである。

和名抄は「炬火」は、「庭燎」とか「篝火」とか「烽燧^{トブ}」とか、その使用目的や形態の面からの類概念で類聚したのであることは明らかである。

燈火具として類聚された「松明」に俗訓「たいまつ」が生じ、やがて「炬火」もその「たいまつ」という和訓の中に併呑された所に、われわれをいささかとまどわせたのだと考えておこう。

(本学名誉教授)